

東山動植物園お花畑の再整備について ～にぎわいの創出に向けて～

伊藤 唯¹

¹名古屋市 緑政土木局 企画経理課 (〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号)

東山動植物園お花畑は、整備されてから30年以上が経過し、施設の老朽化や魅力の低下により来園者の足が遠のく状況となっていた。このため、四季を通じて花や緑とふれあう機会を拡充するとともに、新たな魅力を創出することで魅力ある施設となるよう再整備し、2024年3月にリニューアルオープンした。

今回の再整備は、にぎわいの創出に重点をおいて整備計画をまとめたことが特徴として挙げられる。本稿は、これまでの取り組みをまとめ、公園整備計画におけるにぎわいの創出について考察するものである。

キーワード 公園の再整備、にぎわいの創出、デザインゾーニング

1. はじめに

東山動植物園は、1937年3月の開園以来、長年にわたり市民の憩いの場として親しまれており、年間280万人以上の入園者を誇る日本有数の動植物園である。しかし、開園から約70年が経過した2007年ごろには、動植物園の役割・使命の変化、施設の老朽化やレジャーの多様化による入園者減少などが課題として浮上してきた。これを解決するために、東山動植物園は「人と自然をつなぐ懸け橋へ」という目標を掲げ、2006年度に東山動植物園再生プラン基本構想、さらに2007年度に基本計画を策定した。その後、2010年度には新基本計画を策定し、開園100周年を迎える2036年度の完成を目指して事業を推進している。

再生プラン新基本計画では、年間入園者数350万人を目標とし、市民が誇れる動植物園として本市の観光拠点となることを目指している。その中で植物園のお花畑は、「にぎわいのコーナー」として市民参加による植物園づくりやキッチンカーなど飲食物販の提供による楽しみのある空間づくりを計画している。そして、概ね5年ごとに策定される事業計画の第三期事業計画（2020年度～2024年度）では「花と緑のふれあいゾーン」として位置づけられ、四季を通じてより多くの人が集い、にぎわいを創出する新たな魅力あるエリアとして整備を計画した。これらに基づき、2019年度に東山植物園お花畑再整備基本計画を策定し、2021年度から整備工事を進め、2024年3月にリニューアルオープンした。

今回の再整備は、東山動植物園という本市の観光拠点を目指す施設において、にぎわいの創出に重点を置き整備計画をまとめたことが特徴として挙げられる。本稿は、

これまでの取り組みをまとめるとともに、公園整備計画におけるにぎわいの創出について考察するものである。

2. お花畑の概要

(1) お花畑の開設

お花畑は、かつて「芝生広場」と呼ばれていた植物園東部の園内最高標高となる丘に、1987年の開園50周年を記念して、面積3,600m²の大きな花壇として造成され、「世界のお花畑・四季のせせらぎ」として開設されたものである。一面に広がる花畑はその大規模なスケールにより、非常に大きなインパクトを与え、人気を博した(図-1)。その後、1990年に「お花畑展望休憩所」が設置され、その階下には雨宿りや飲食ができる休憩所と屋外ステージが併設された。これにより、小規模なイベントが開催可能となり、チェーンソーアートの実演なども行われるようになった。

(2) 花いっぱいプロジェクト

「世界のお花畑」として花壇を維持管理していたが、



図-1 お花畑完成時のにぎわい

維持管理費の縮減に対応するため、植え替えの回数を減らし、宿根草や低木の面積を増やす措置を講じてきた。2010年からは、市民参加型の「花いっぱいプロジェクト」という形態に移行し、花壇の維持を続けている。このプロジェクトは、市民や企業との協働による花壇づくりを目的としており、参加企業・団体が苗などの資材提供から花壇作りの計画、植付け、除草などの維持管理までを負担するものである。参加者にとっては他団体との交流や植物園主催の講習会による技術向上が期待でき、企業にとっては、企業イメージの向上やCSRの実現が図れる。また、植物園にとっては維持管理費の低減に加え、来園者の増加と花壇の展示レベルの向上が期待できる。なお、開設当初3,600m²あった大花壇は、再整備前の2021年時点では約600m²に縮小され、春、夏、秋の年間3回、植え替えを実施していた。

(3) 再整備前の状況

お花畑は緩やかな傾斜の丘になっており、その中段から下段エリアにかけて整備されていたせせらぎは、老朽化により、ポンプの一部しか稼働できない状態となっていた。さらに、上段エリアにあった展望台は、老朽化により撤去されるなど、整備されてから30年以上が経過し、エリア全体の老朽化が進行している状況だった。

下段エリアで「花いっぱいプロジェクト」による花壇づくりが行われているものの、奥の中段から上段エリアには来訪の目的となる展示や施設が不足していた。そのため、お花畑を訪れる来園者は少なく、「にぎわいのコーナー」には程遠い状況だった。そこで、再整備に合わせた、新たなにぎわい創出につながる工夫が求められた。

3. 整備計画の検討

(1) にぎわい創出に向けた課題

「花いっぱいプロジェクト」による活動や各種イベン

ト、行事に伴う一時的なにぎわいが見られるものの、平常時のにぎわいが不足していた。そのため、イベントや行事がなくても「目的地」として機能することが課題だった。

また、「花いっぱいプロジェクト」においては、年3回の植え替えにより、春から秋にかけては花が充実しているが、秋から冬にかけては花が少なくにぎわいも減少していた。これに対処するため、秋から冬の間でも魅力ある植物を充実させるなど年間を通じた魅力の向上が求められた。

さらに、植物園の主たる来園者層は植物に高い関心を持つリピーター層や高齢者層であり、学生やファミリー層など幅広い年齢層をターゲットにすることも課題だった。

(2) 整備テーマとコンセプト

課題を踏まえ、「花が創出するにぎわい・憩いの空間づくり」をテーマとし、次の3つのコンセプトを定めた。

①「花いっぱいプロジェクト」の継続に加え、イベントなどの活動が行える場を整備する。②植物をより身近に感じ、年間を通じて魅力的な植物に囲まれた憩いの空間を提供する。③植物愛好家に加え、学生やファミリー層など新たなターゲット層の来園を促進する。これらのテーマとコンセプトをもとに基本計画をまとめた。

(3) 施設展開案

施設展開の検討時には、周辺地域のまちづくりに関わる企業や子育て世代との意見交換、花いっぱいプロジェクト参加企業へのヒアリング、来園者アンケートなどの分析によるニーズの調査を行い計画を取りまとめた。

「若者を呼込むには写真映えする空間があると良い」「遊具があると子供の目的地となる」といった意見があり、それら意見を参考にしながら①東山動植物園のマスコットキャラクター「ズーボ」を活かし、童話のような

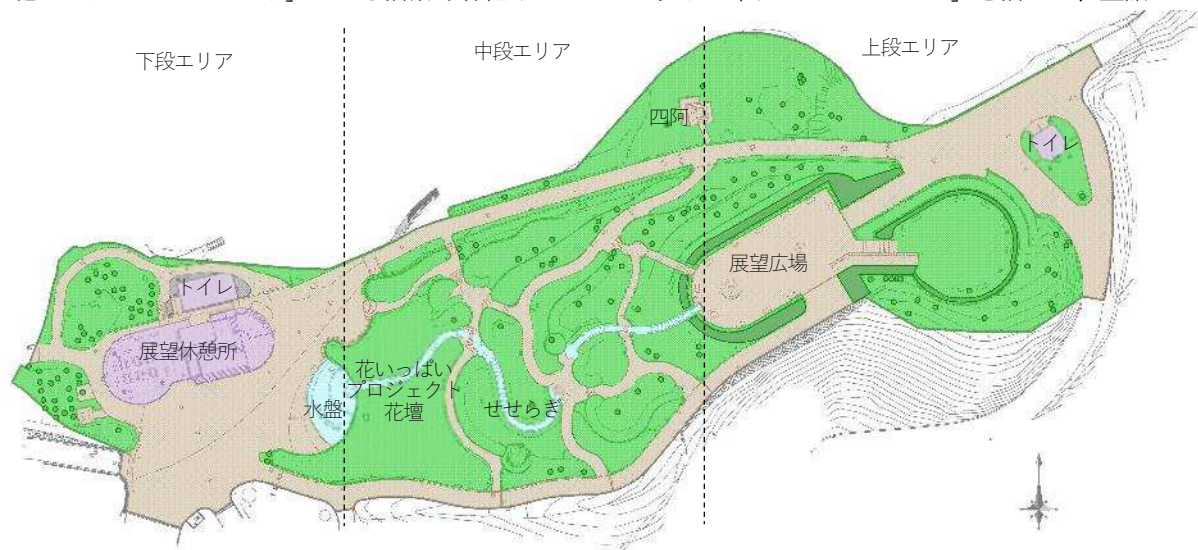


図-2 再整備前平面図

雰囲気の世界観、景観を表現する施設展開案、②ファミリー層をメインターゲットとした遊具中心の施設展開案を検討した。最終的には2案を組み合わせ「ズーボの世界観」の表現に加え植物観賞を中心に、植物とのふれあいや学び、遊びといった幅広いニーズに応える計画としてまとめた。

(4) ゾーニング

まず、機能ごとにゾーンを5つ設定した(図-3)。①『にぎわい』 既存水盤付近の砂利敷きになっていた箇所を広場に改修し、イベントの開催やキッチンカーの出店を想定した新たなにぎわいの広場とする。②『花にふれる』 「花いっぱいプロジェクト」の舞台となるゾーンで、企業や団体の手による花畑とし、写真映えする空間も意識した整備とする。③『木々にふれる』 オリーブの古木をシンボルツリーとし、ハーブガーデンやグラスガーデン、バラの小道などをつくり年間を通じて植物を楽しめる空間とする。④『憩い』 各種ベンチや休憩所を点在させた芝生広場でピクニック利用やバラなど四季の植物の鑑賞ができるとともに、ミストで水遊びできる施設も

整備し、幅広い世代が集う空間とする。⑤『遊び』 アベマキの大木を囲むデッキや花びらをモチーフとしたすべり台といった遊具を整備し、これまで少なかった来園者層も楽しめる遊びの空間とする。

また、機能ゾーニングとは別に、空間のストーリー性を持たせるデザインゾーニングを行い、エリア全体で「ズーボの世界観」を表現した(図-4)。ズーボは、東山の森住む妖精で、おなかの「&」にあるようにいろんなものをつなぐことが得意というキャラクターである。キャラクター設定を活かして「恥ずかしがり屋のズーボが姿を見せることは少ないが、様々な場所に残された痕跡をたどることで植物に親しむきっかけを生み出し、来園者に植物との関わりを広げてもらう」というストーリーを設定した。お花畑エリアを「ズーボをはじめとする妖精たちが暮らす村」と捉え、村を訪れた人々がズーボのおうちや周辺のガーデン、丘をめぐることで植物に親しみ憩うことができるように計画した。デザインゾーニングとしては、以下の3つのゾーンを設定した。①『まちのゾーン』 催し物が開催され、キッチンカーなどでにぎわうゾーンで、妖精たちが無機質な既存施設を植物で



図-3 機能ゾーニング



図-4 デザインゾーニング



図-5 リニューアル状況

装飾された空間に変えていくゾーン。②『ズーボのおうちゾーン』 大地や植物に溶け込んだズーボのおうちと周囲のガーデンが豊かな暮らしを演出するゾーン。ズーボと森の仲間たちのくつろぎスポットが点在する。③『雲の丘ゾーン』 村の中で最も天空に近い丘。山頂から空まで駆け巡るズーボの散歩コース、ミスト噴水による雲の中体験、アベマキの巨木の樹冠に近づくデッキ道、仲間と滑れるすべり台などがあり、遊び疲れたら芝生広場でピクニックや昼寝ができる。雲のような特徴的な形態の建物が点在する。

機能ゾーニング及びデザインゾーニングをもとに実施設計を行い、整備工事に着手した。

4. 整備工事

整備工事は、2021年度から2024年度までの期間に実施し、リニューアルオープンした(図-5)。主な施設の整備内容は以下の通りである。

(1) 花いっぱい花壇

傾斜を活かして花が絨毯のように一面に広がる花壇を整備した(図-6)。これまで通り、市民や企業との協働により年3回の植え替えを行い、季節ごとの花がにぎわいを創出する。花壇の前面は、キッチンカーの出店やイベントの開催を想定した広場として再整備を行った。また、花壇を背景に写真を撮影できる「葉っぱのベンチ」を設置するなどフォトスポットとなることを意識した整備で、



図-6 花いっぱい花壇（ひまわり）

これまでこのエリアを訪れることが少なかった来園者層も楽しむことができる空間とした。

(2) ズーボのおうち

粘土に藁などを混ぜた土壁を用いて建てるコブハウスをモチーフにした「ズーボのおうち」は、リビングルームをコンセプトとした「大きなおうち」と、寝室をコンセプトとした「小さなおうち」の二つがある。童話のような雰囲気の外観、内装はかわいらしくズーボの世界観を演出している(図-7)。休憩所や写真映えするフォトスポットとなるほか、壁面にはシルエットとなった小さなズーボが描かれており、子供たちも隠れたズーボを探して楽しめる施設となっている。周辺には、ハーブガーデンがあり、花のない季節でも葉の色や形、香りを楽しむことができる。また、風景に溶け込むカタツムリやお花を模したベンチ、ズーボが先程までそこにいたかのようにシルエットだけが残された「ズーボのガゼボ」を設置するなど、様々な工夫でズーボの世界観を表現した。

(3) 千年オリーブ

もともと薪炭林だった植物園エリアには、古木が少ないため、お花畑にはシンボルツリーとして推定樹齢1,000年の「千年オリーブ」を導入した。オリーブは本市の姉妹都市トリノのある地中海エリアの植物で、平和、繁栄、希望の象徴とされている。大きく成長した幹や枝には迫力と独特の趣が生まれており、近くに植えられている若いオリーブの木と比較することでその成長の過程



図-7 ズーボのおうち内装 ズーボのシルエット

を観察することができる（図-8）。

(4) 雲の広場

芝生が広がるピクニックエリア。ファミリー層等が快適に過ごせるよう、雲をイメージしたテラスやトイレ、休憩所、ミストを設置した(図-9)。ベンチに腰掛けながらゆったりと眺望を楽しむことができる「雲のテラス」では、ベンチの座面に発泡ウレタンを採用し、長く滞在しても疲れにくい造りとした。「雲のトイレ」と「雲の休憩所」は膜素材の屋根を雲のような形状にし、下段エリアから見上げると丘の上に浮かぶ雲のように見える意匠とした。また、「雲のトイレ」は、ファミリー層を主な利用者と想定し、キッズトイレと多機能トイレのみで構成することで、近くにある既設のトイレと差別化をした。夏季限定で稼働する「雲のミスト」は、霧状の水が噴き出す水遊び場で、雲の中に入ったような体験ができるよう設置した。

(5) アベマキの丘

このエリアにはこれまでなかった子供たちが遊べる施設として、花びらをモチーフにした大型のコンクリート製すべり台である「花びらすべり台」や、花壇の中を駆け回るような体験ができる平均台「花わたり」を設置した。さらに、動植物園内で最も標高が高い立地を生かし、遠く名古屋駅高層ビル群の眺望を楽しむことができる「アベマキデッキ」を整備した(図-10)。アベマキの大木を間近に観察できるほか、デッキの上にはどんぐり帽子（殻斗）を模したモニュメントを設置し、フォトスポットとしての活用はもちろん、解説サインと併せて、どんぐり帽子のさまざまな形を楽しみながら学ぶことができ



図-8 千年オリーブ



図-9 雲の広場

るものとした。

5. リニューアルオープン

2024年3月23日に、市長および関係者を招いてリニューアルオープン式典を実施した。当日はあいにくの雨模様であったが、近隣の愛知総合工科高校や椋山女学園大学の学生による演奏も行われ、盛大にオープンを迎えることができた。オープン後、桜の開花とともに来園者が増加し、桜のライトアップイベント「宵の八重桜さんぽ」に併せてお花畑のライトアップも行われ、特に多くの来園者で賑わった(図-11)。

6. にぎわい創出のための工夫

リニューアル後は、これまであまり見られなかったファミリー層の来園者をよく見られるようになったほか、平日には保育園の遠足で賑わう様子も見られるようになった。今回の整備が、平時のにぎわいの創出と幅広い来園者層の目的地となるという課題解決に一定の成果をもたらしたと考えている。目的地となるための整備における工夫としては以下の2点が挙げられる。

(1) 目的となる魅力ある空間を作るためのデザインゾーニングの設定

今回の整備の最大の特徴は、単なる機能ゾーニングだけでなく、デザインゾーニングを導入したことである。ゾーボの世界観を表現することを目的としたデザインゾーニングがあることで、全体の施設および各ゾーンの統一感が向上し、より魅力的な景観と施設を実現することができた。整備には、複数の設計・施工業者、市の職員



図-10 アベマキデッキ・花わたり



図-11 ライトアップ



図-12 雲のミスト舗装、雲のトイレ建具

においては、維持管理・工事・催事運営の担当者、さらに複数年にわたる事業の中での職員の異動など、多数の業者、職員が関わった。私が携わったのは主に工事着手後の部分だったが、基本設計で設定されたデザインゾーニングの各施設のデザイン意図の明確性によって、整備を一貫して進めることができた。例えば、雲の広場・アベマキの丘は、機能ゾーニングでは憩い・遊びのゾーンとして設定され、デザインゾーニングでは「天空に近い丘は、山頂から空まで駆け巡るズーボの散歩コース」として『雲の丘ゾーン』と設定されていた。この『雲の丘ゾーン』という設定は、職員だけでなく施工業者や施設のメーカーとも共有することで、舗装や建物の内装といった細部まで空、雲をイメージしたカラーリングにすることにつながり、このゾーンを統一したデザインで施工することを可能にした（図-12）。このように、各施設を独立したものとしてではなく、エリア全体のデザイン意図を共有し、ゾーニング全体の一部としてとらえることは、全体に統一感をもつ魅力的な空間の整備を可能にすると考えられる。

(2) 幅広いニーズに応えられる施設整備

今回の再整備では、行事やイベントでのさらなるにぎわい創出とこれまで少なかった平時のにぎわい創出ができるように整備を検討した。行事やイベントのにぎわい創出としては、花いっぱいプロジェクトや花を活かした魅力向上など、主に再整備前から行われていた行事を継続・改良する形で整備を行い、さらなるにぎわいの創出を実現した。また、これまでお花畑エリアでは開催されていなかった夜間開園時のライトアップをできるようにし、隣接する桜の回廊とともに、桜の時期の新たな植物園の魅力を提供し、「目的地」としての価値を高めた。

平時のにぎわい創出としては、特に植物園への来園頻度が低かった学生やファミリー層をターゲットに、すべり台などの遊具やキッズトイレのあるピクニックエリア、リーフベンチなどのフォトスポットといった「目的地」を各ターゲット層に応じて造りあげた。また、東山動植物園のキャラクター「ズーボ」をテーマにした「ズーボのおうち」や「ズーボのガゼボ」といった当園独自の施



図-13 花びらすべり台

設を設置し、ここにしかない付加価値を提供することで「目的地」としての価値を高めた。さらに、各ターゲット層のニーズに応えつつも、デザイン面で各ターゲット層に特化した施設とならないよう整備を意識した。例えば、『遊び』のゾーンのすべり台である。新たにすべり台などの遊具を整備することでファミリー層に特化してしまい、他の来園者層が周辺の施設を利用しづらくなるのではないかという懸念があった。そこで、すべり台は高低差のある地形を活かしつつ、雲の広場との連続性を考えた景観に溶け込むデザインとし、この懸念を払しょくした(図-13)。このことは、一見独占的と考えられる施設の整備であっても、デザインの工夫によってそれが解消できることを示唆している。

7. まとめ

今回の整備では、機能面において幅広いニーズに応えつつ、「統一感のある空間のデザイン」を特に重視することで、機能としての目的地に加え、景観としても訪れたくなる「目的地」となり、にぎわいを創出することができたと考えられる。複数年にわたる事業では、行政の担当者や施工業者が変わることにより、デザインの統一性の喪失が懸念される。その対策として今回の再整備のように、施設の計画に加え、空間デザインのコンセプトを明確にするデザインゾーニングを導入することが有効である。また、本市の公園整備においては、レクリエーション施設や子供の遊び場、災害時の避難場所といった機能面が重視されることが多く、デザインの統一性まで検討できていないことも多い。にぎわい創出という観点以外にも、統一感ある景観の形成は、公園への愛着心を育み、居心地の良さなどの利用者の満足度向上を可能にし、今後の公園利用に大きく寄与するものと考えられる。

本事例は、動植物園という特殊な公園での事例であるため、すべての公園に適用できない。しかしながら、にぎわいの創出や幅広い層の利用促進など課題は共通するものがあり、一定の成果があったと考えている。にぎわいの創出を目指した今回の報告が、一例として今後の公園整備の参考となれば幸いである。